

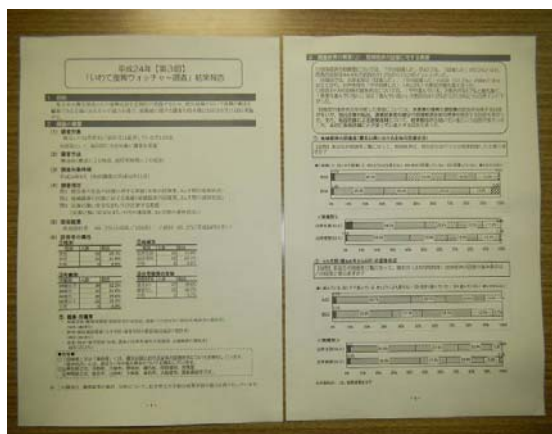
被災地派遣レポート＜第83回＞

環境局都市エネルギー部

分散型エネルギー推進課 丸山 洋三さん

冬の寒さがまだ残る盛岡駅前のロータリーで、地図アプリを表示したスマートフォンを片手に、落ち着きなく周りを見渡していた昨年3月の終わりのことを、私はまだ昨日のことのように憶えている。盛岡駅から県庁舎まで歩いて約20分、途中で「岩手県一の繁華街」と地元で言われている商店街を抜け、交差点を曲がると、官庁街の一角に天然記念物の「石割桜」とともに役所的な建物が現れた。これから貴重な経験を重ねる舞台となる岩手県庁舎との初めての対面だった。

県庁12階の講堂を震災時に緊急改装した執務室では復興局の職員約40名が働いていた。国からの派遣者、大阪、東京等の自治体からの派遣者はそのうちの約4分の1程度を占めていた。業務の中では、復興局のみならず県庁内の各部署からも注目され、期待されていることをひしひしと感じた。私の担当業務は、「いわて復興ウォッチャー調査」という沿岸被災地の調査、岩手県内の各団体代表者を委員とした「復興委員会」の運営、「復興交付金事業計画」の策定支援等であった。それぞれ岩手県の復興に関わる重要な仕事であり、日々の緊張感あふれる業務によって貴重な経験を積むことができたが、この中で特に印象に残っているのは「いわて復興ウォッチャー調査」である。



いわて復興ウォッチャー調査 報告書



釜石市の復興交付金事業（農用地災害復旧関連区画整理事業予定地）

この調査は、沿岸被災地に居住又は就労する方々153名に対して、年に4回（2、5、8、11月）に「生活」、「経済」、「安全」の3分野について同じ質問を行い、結果を知事に報告するとともに県民等に公表するものである。沿岸被災地の状況は、私が実際に現場を視

察した、震災から1年が経った時点でもガレキを撤去したのみで、まったく復興が進んでいなかったが、実際に現地で生活している方々に調査を行うと、それが毎回の調査結果にはっきりと表れた。調査回答の自由記載の欄には、現場の生々しい状況が綴られており、心が痛むこともあったが、同時に私の心にこみ上げたのは「この現場の状況を調査結果の報告を通じて多くの人に知ってもらい、沿岸被災地の復興を少しでも後押ししよう。」という思いだった。1枚1枚の調査結果に被災され辛い環境に身を置く方々の思いが詰まっているため、それを報告書にまとめる作業では責任が重くのしかかったこともあった。しかし、調査対象者の方から調査結果が返送された際に「いつも調査お疲れ様。毎回の結果を拝見しています。」と書かれた手紙が同封されていたのを見て、この調査が行政から被災者への一方通行の調査ではなく、行政と被災者双方の意思の繋がりに基づくものであることを感じ、やりがいを感じたことを憶えている。



昨年8月に見直しを行った「岩手県東日本大震災津波復興計画 復興実施計画」
(写真中央)



岩手県復興局（県庁舎 12 階の講堂を執務室としている）

東京生まれ、東京育ちの私にとって、自然豊かな岩手県での一年間の生活は新鮮な発見の連続だった。四季の移り変わりをこんなにも身近に感じながら生活したことがなかったからだ。特に印象深いのは岩手県の山々を背景に稲穂が実った田園地帯を毎週ランニングしたことである。360度どこを見渡しても同じ景色が広がっている田んぼの真ん中で、身も心もリフレッシュしたのを憶えている。また、休日には時間を見つけて沿岸被災地を何度も訪れた。津波被害を受け更地となった場所には、春になると草木が生え、夏にはそれが人の背丈ほどに成長し、冬になると雪に埋もれ枯れていく。この繰り返しですでに2度行われている状況下で、現地に暮らす人は必死に耐えて生活している。そんなことをまったく感じさせないくらい明るくもてなしてくれる被災地の方々の姿には何度も元気をもらった。

東京から遠く離れた岩手県での生活は、数え切れないほど多くのものを得ることができた。特に被災市町村の方々のために自分に何ができるのかを自問自答しながら、自分にできることに全力で取り組んだ経験は今後の自分の糧となるはずである。私は1年間で岩手県の派遣

業務を終えて東京都に戻ったが、私と岩手県をつなぐはこれからもずっと続いていくと思っている。今後、都道府県の枠組みを越えた事業の中で、あの1年間にともに被災市町村のために汗を流した岩手県庁の仲間と一緒に仕事ができたと思うことがある。そのときに成長した姿を見せることができるよう、これからも業務に取り組んでいきたい。